

## 博士學位論文要約

論文題目： 南方熊楠・土宜法龍の研究  
——交わりの視点から読む、近代日本の知識人の主体形成——  
氏名： 小田 龍哉

### 要約：

本論文の題名は「南方熊楠・土宜法龍の研究——交わりの視点から読む、近代日本の知識人の主体構成——」である。

本論文は、南方熊楠（1867—1941）と土宜法龍（1845—1923）とのあいだで交わされた往復書簡を軸に、彼らの思想を両者の交わりの視点から読み解こうとするものである。

交わりの視点とはなにか。それは、ひとつには書簡の当事者たちが邂逅し、書簡のやりとりを開始するにいたるまでの知的ないとなみを、二本の軌跡として描き出すことである。南方は植物学者・民俗学者などとして知られた在野の知識人、土宜は明治・大正期の真言宗の僧侶だったので、二本の軌跡はいずれも思想史・宗教史的な色彩の強いものとなる。また、交わりというからには、二本の線が交わったのち、離れていく様子も追わなくてはならない。

もうひとつは、書簡の往復状況という交わりである。南方・土宜往復書簡は、両者が出会った翌月の1893年11月から、土宜の死の前年にあたる1923年の10月まで、およそ30年間にわたって（それぞれ5年ほどの二度の空白期をはさんで）つづけられた。現在までに発見されている書簡の総数は計152通。その内訳は、土宜宛南方書簡（以下「南方書簡」）が73通、南方宛土宜書簡（以下「土宜書簡」）が79通である。

本論文では、1893年から1904年までの期間に認められたことが判明している未翻刻の土宜書簡19通を翻刻し、その全文を「資料編」として巻末に収録する。そのことで、これまで偏りのあった両者の書簡の翻刻状況が是正され、より公平な視点で書簡の往復状況を検討することが可能になった。

特に重要なのは、1902年1月から1904年10月までの土宜書簡14通が、今回あらたに翻刻されたことである。この時期は、足かけ14年におよぶアメリカ・イギリスでの生活から帰国した南方が、故郷の和歌山で1年あまりをすごしたのち那智の山中に居を定め、採集と思索とに明け暮れた、「那智隠栖期」に重なる。南方の認識論のモデルをあらわしたものとして鶴見和子によって高く評価され、以降、南方を読む者たちの興味を惹きつけている「南方曼陀羅」と呼ばれる複雑な線描図も、ちょうどこの時期、1903年8月17日の土宜宛書簡のなかで描かれたものだ。

ところが、これまで同時期の土宜書簡は、計19通存在が確認されているうちの、わずか3通しか翻刻されていなかった。だが今回の作業によって一挙にその5倍ちかくの数の書簡が活字化され、南方の思索の高まりを往復書簡の片側からだけでなく、交わりの視

点から読み解くことが可能となった。そのことの意義は大きい。

さて、以上のような方法で南方・土宜往復書簡を読むことをつうじて、本論文では、近代日本の知識人における言葉と主体形成との関係について考察をおこなう。本論文では、われわれ一人ひとりの主体は日々の生活の局面で各人が言葉を多様に「語りわけ」ることをつうじて形成される、という見方をとる。たとえばそれが学者や宗教者であれば、「真理」や「さとり」といった、各々の追求する境地をあらわす概念をどう語るか（あるいは語らないか）によって、彼らの主体は形作られることになる。そして、往復書簡の「交わり」を詳細に分析すると、南方や土宜にとっての問題関心も、まさしくその点にあったことが浮かびあがってくる。

彼らが熱心に議論を交わした比較宗教論や仏教改革論は、明治という時代において仏教がどのように真理を語り、社会とかかわっていくべきか、を問うものであった。また、とりわけ南方にとっては、かならずしも近代社会の機制に十分には適応できない〈わたし〉という主体が、世俗のなかでどのように他者と適度な「距離」をたもちつつ語ることができるか、が重要な課題だった。

一方は在野の学者、他方は密教者という南方・土宜の両者はともに、明治期の学問状況のなかではメインストリームには配されない知識人だった。しかし、それゆえに近代日本思想のメインストリームとは温度差があった。南方と土宜との思想の共通点は、現象と実在とを一元的に「相即」させる「現象即実在論」の系譜には属さず、むしろその「一」性を「多」へと解体してしまうような傾向を持っていたことだった。

本論文は、以下のような章で構成されている。

- ・ 序章
- ・ 第一章 「宗教」の耐えられない軽さ——密教・福澤・希望の神学
- ・ 第二章 嘔吐する学問——南方熊楠「事の学」とその〈逆流の方法〉について
- ・ 第三章 妖怪の外部には出ることができるか——井上円了と南方熊楠の学問
- ・ 第四章 土宜法龍と「事」ども——真言密教からみた「事の学」の再検討
- ・ 第五章 逃げ去る土宜法龍——安政元年のスキゾ・キッズ
- ・ 第六章 未完の「南方曼陀羅」——『維摩経』で読む南方・土宜往復書簡
- ・ 終章 もうひとつのロマンス——南方熊楠と恋と仏教

以下、各章の概略となる。

まず序章で考察される問題は、語ること／語らないことと〈わたし〉との関係についてわれわれが考えるさい、本稿全体の議論の重要な参照点となるものである。はじめに本章では、真言宗の朝廷儀礼・後七日御修法の1882年の再興運動に焦点をあて、その中心的役割をはたした釈雲照（1827—1909）の取り組みを検討する。そしてその背後に、福澤諭吉（1835—1901）がかかわった、J・S・ミル（1806—1873）の宗教論、『宗教三論』（1874年）の日本語版出版における、第三論文「有神論」の翻訳中止の問題をみてとる。

ミルは同論文で、愛する死者との再開の希望を抱くことで自身を律し、より価値のある人生をもとめるのだとする、「希望の神学」と呼ばれる宗教論・主体形成論を説いた。その日本語訳中止の判断の裏にあったのは、ともに死者に誠実であろうとしたミルと福澤の両

者の、その想いを語ることに語らないこととの距離であった。

明治初年の啓蒙主義の思潮のなかで、宗教は「軽い」ものだと価値づけがなされる。それに対して宗教者たちがとった手段は、みずからの「軽さ」を否定し、「重さ」を主張するために、大いに語ることだった。後七日御修法再興運動は、今日のわれわれが無意識の前提としている「宗教」概念には包摂されないような、宗教者による近代化のこころみのひとつであった。ミル、福澤、釈の三者が交わる結節点となったのは、若き日の土宜だった。本章ではまた、彼が当時の仏教演説会でおこなった「レリジョン」批判と、ユニークな啓蒙主義的仏教改革論も紹介する。

第二章では、南方の「事の学」を、近世以降の日本思想史における特定の系譜に位置づける作業をおこなう。

南方の学問は、彼の特技であった「嘔吐」を思い起こさせる。彼の思考のプロセスは、〈わたし〉(正)が異物(反)を取り込んで内面化(合)するという、人間の食物の消化にも似たそれとは、著しく特徴を異にしていた。彼にとっては、事物を噛み砕き、リニアな消化のプロセスへぐっと飲み下してしまうのではなく、それを「思い思いに順序立てて」反芻する態度こそが、まさに「科学」であり、「学問」なのだった。

そうした視点から「事の学」をふりかえると、それが、「理」という朱子学の説く宇宙の一大原理では語ることが困難なものを「事」という言葉であらわした、江戸期の芸道書・政道書や、伊藤仁斎(1627—1705)、荻生徂徠(1666—1728)らの思想につらなるものだったのではないか、という「事」の思想の系譜が見出されてくる。

やがて時代は明治を迎え、「理」は「物理」と「心理」とに二分化される。それらを統べる全体性としてあらたに導入されたのが、「哲学」という学問だった。南方の「事の学」とは、そうした「哲学」でもやはり語ることができない世界のありようを、「事」という言葉を立てて反芻し、露わにしようとするものだったといえる。

また、江戸—明治期の「事」の思想の系譜を考察するなかで同時に浮かびあがってきたのは、「活物」という、「事」とおなじく語られることが困難なものを語る言葉の系譜だった。本章では、井上円了(1858—1919)の「活物」論と南方のそれとの比較もおこなう。

南方は井上の批判者だった。彼はおもに井上が自身の学問と国家や階級とを結びつけて語ることを批判したが、その口吻を手がかりに、つづく第三章では南方の「事の学」と井上の妖怪学との比較をおこなう。一方で南方と井上は、人間一人ひとりが宇宙の靈的原理から産出されたものであるという、きわめて一元的な宇宙観を共有してもいた。

各地から膨大な数の妖怪譚を収集し、啓蒙主義の見地から検討・分類することで、井上は真の妖怪「真怪」を概念化していく。井上にとって「妖怪」とは、言葉では語ることが困難なものの謂いであり、井上の学問は、やがて近代日本思想の主流をなしていく「現象即実在論」の系譜の端緒として位置づけられるべきものである。

南方が反発したのは、「妖怪」という便利な言葉で全体性を語ってしまうこと、さらには、それを「国家」といった枠組みに安易に「相即」させてしまうことに対してだった。井上が描いた靈魂不滅論の図と「事の学」の図を比較すると、「事の学」の図には、井上「真如」や「理想」と呼ぶ、全体性を示す境界線が描かれていないことが一目瞭然である。南

方の井上に対する一連の批判は、両者の学問的な態度のちがいが導かれた正当な根拠のあるものだった。

第四章および第五章では、往復書簡のもう一方の当事者、土宜の思想の軌跡たどる。

まず第四章では、「即事而真」と「而二不二」という言葉に注目し、真言密教が儀礼や論義の場で「事」を多様に分節化し、さらにそれを「即事而真」として現実の世界に応用しようとする「事の教」であったことを導く。また、井上が大きな影響を受けた天台宗の教えが「一」との相即を説くものだったのに対し、真言宗の教えは即の「多」性を説くものであることを考察する。

土宜は、そうした「事の教」の近代化を牽引した立役者だった。彼は高野山の僧侶たちに向けた講演で、「即事而真」にはふたつの意味があり、ひとつは密教儀礼の功德を他者に回向する（差し向ける）こと、もうひとつは、積極的に社会事業に取り組むことだと述べている。彼は一貫して社会事業の重要性を説いた。ただし、そうした「多」なる「而二」の立場は、一方で現実社会の不平等を肯定する布教論をもたらす側面もあった。

第五章では、これまで顧みられることのなかった土宜の雑誌掲載論考や仏教演説に注目し、彼が言葉を語ること（あるいは語らないこと）で、どのように〈わたし〉と他者との関係を切り結んだのか、検討をおこなう。

土宜は一流の逃走者だった。仏教新聞『明教新誌』の誌面では、〈土宜法龍〉、〈田中雲外〉、〈三島孝蔵〉という三つの筆名を使い、巧みに言葉を語りわけた。また、保守化したと周囲に評された彼の後半生の演説では、プロテスタント的な「宗教」概念をめぐって、青年期とはまったく正反対の趣旨を述べているが、その実、「世間はこんな風にな、利用しなければならぬ」と弟子たちの前ではしたたかさを覗かせた。

ならば、ようするに彼は不誠実な語り手だったのか。否、安易にそうとは断定できなさそう。発言を注意深く追えば、彼は自身の言表を、最終的には常に彼自身に向けて問いかけていた様子が読みとれる。それは、青年期から最晩年まで一貫した彼の言葉への態度だった。そうした〈ブーメラン式〉とでも呼ぶべき主体形成論によって、彼は、逃走する〈わたし〉をさらなる逃走へと駆り立てていたのだ。

第六章では、往復書簡における南方と土宜との思想的交わりが、いよいよ具体的に検討されることとなる。嘔吐する南方と、逃走する土宜との邂逅である。

われわれは、さらにそこに『維摩経』という補助線を引いて読み解いていく。これまで、南方の思想に仏教が与えた影響としては、『華嚴経』や真言密教、あるいは彼の著作のなかで多く引用される仏教説話を中心に議論されることが多かった。往復書簡を『維摩経』で読むことによって、往復書簡のやりとりが、世俗のなかでいかに超越してあるか、というまさに同経で説かれるテーマを踏襲した議論であったことがあきらかになる。

真理をどう生きるかを重要視するという点では、南方と土宜とは、はじめから意見が一致していた。食いちがっていたのは、言葉に対する彼らの〈わたし〉の立ち位置だった。土宜の「事の教」は、〈わたし〉を特権的な位置に置き、たしかな足場から語ることで世俗の社会をより良く変えていこうとする教えだった。それに対して南方の「事の学」は、あくまで〈わたし〉を世俗のただなかに置き、そこで語ることで真理を生きようとする学問であった。

しかし、その議論のなかで描かれたいわゆる「南方曼陀羅」の線描図は、生きるための思想としては未完のものだった。そこには、井上の靈魂論とも価値観を共有する、「一」なる宇宙の原理が大きく影を落としている。同図をめぐって南方の〈わたし〉の不思議の探求が深まっていく過程で、彼は次第に、「一」と「多」とのダブルバインドに引き裂かれていく。結局、きわめて不安定な精神状態に陥った彼は、ついにその「<sup>サイキアトリ</sup>変態心理の自分研究」を断念し、那智の山中から下りることを決意することとなる。

終章では、「南方曼陀羅」以降に南方が確立した語りの文体を検討し、現代を生きるわれわれにとっての、他者との適度な「距離」の関係について考察する。

まず前半では、まず、発表された時期もメディアもことなる南方のふたつのテキスト、「龍聖法印に与うる書」（1889年）と「<sup>むすぶのかみ</sup>月下氷人——系図紛乱の話」（1913年）とをとりあげ、南方がなぜ仏教を語るようになったのか、そして、その語りが年月を経てどのように変化したのかを検討する。

そして後半では、前半の議論を承けて、南方の「恋」と主体形成について考察する。そして、南方という〈わたし〉が、一方では亡き友・羽山繁太郎（1868—1888）との叶わぬ「恋」と道ならぬ「恋」という二重の断絶によって徹底的に異端化され、しかし他方では、律蔵の文体によって嘔吐しながら語りつづけるという、「もうひとつのロマンティズム」によって形作られていたことを導く。

以上の考察によって、南方と土宜のそれぞれのユニークな主体形成のありかたが、その思想史的系譜とともにあきらかになった。南方は繁太郎との恋を、土宜はそのペンネームに込められた「雲外」の高みを、めいめいにまなざして生きた。彼らがまなざしたものは、それらがいずれも「一」なる全体性に包摂されえないという点で一致していた。

土宜は、近代的な「宗教」者としてきわめて特権的な主体の形成を追求したかのようにもみえる。しかし、常に〈ブーメラン式〉にみずからを振り返る厳しさを、その生涯をつうじて忘れていなかったことは重要である。一方、南方の主体形成のありかたには「戒律」と「恋」とが大きく影響していた。それは、ミルの「希望の神学」ともつうじあう、愛する死者と自身との関係を異端として聖化し、メインストリームの言説と「語りわけ」ことで他者との適度な「距離」をたもつという、きわめてアクチュアルな主体化論であった。

主な引用文献・参考文献を下記に挙げる。

- ・ 浅田彰『構造と力——記号論を超えて』勁草書房、1983年。
- ・ 浅田彰『逃走論——スキゾ・キッズの冒険』ちくま文庫、1986年。
- ・ 東浩紀『存在論的、郵便的——ジャック・デリダについて』新潮社、1998年。
- ・ 安藤礼二『光の曼陀羅——日本文学論』講談社、2008年（講談社文芸文庫、2016年）。
- ・ 安藤礼二『近代論——危機の時代のアルシーヴ』NTT出版、2007年。
- ・ 安藤礼二『場所と産霊——日本近代思想史』講談社、2010年。
- ・ 安藤礼二『折口信夫』講談社、2014年。
- ・ 飯倉照平『南方熊楠の説話学』勉誠出版、2013年。
- ・ 飯倉照平『南方熊楠——梟のごとく黙坐しおる』ミネルヴァ書房、2006年。
- ・ 飯倉照平・長谷川興蔵編『南方熊楠百話』八坂書房、1991年。

- ・ 磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道』岩波書店、2003年。
- ・ 磯前順一『閩の思考——他者・外部性・故郷』法政大学出版局、2013年。
- ・ 磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教——姉崎正治の軌跡』東京堂出版、2002年。
- ・ 伊藤整「近代日本人の発想の諸形式」1953年（『近代日本人の発想の諸形式 他四編』岩波文庫、1981年）。
- ・ 大久保良俊『台密教学の研究』法蔵館、2004年。
- ・ 鎌田茂雄『維摩経講話』講談社学術文庫、1990年。
- ・ 唐澤太輔『南方熊楠の見た夢——パサージュに立つ者』勉誠出版、2014年。
- ・ 唐澤太輔『南方熊楠——日本人の可能性の極限』中公新書、2015年。
- ・ 柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』岩波書店、2008年。
- ・ 小林丈広『近代日本と公衆衛生——都市社会史の試み』雄山閣出版、2001年。
- ・ 小林丈広『都市下層の社会史』部落解放人権研究所、2003年。
- ・ 小林丈広『明治維新と京都——公家社会の解体』臨川書店、1998年。
- ・ 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店、1998年。
- ・ 酒井直樹『過去の声——一八世紀日本の言説における言語の地位』以文社、2002年。
- ・ 千田智子『森と建築の空間史——南方熊楠と近代日本』東信堂、2003年。
- ・ 互盛央『エスの系譜——沈黙の西洋思想史』講談社、2010年（講談社学術文庫、2016年）。
- ・ 高木博志『近代天皇制の文化史的研究——天皇就任儀礼・年中行事・文化財』校倉書房、1997年。
- ・ 武内善信『闘う南方熊楠——エコロジーの先駆者』勉誠出版、2011年。
- ・ 伊達聖伸『ライシテ、道徳、宗教学——もうひとつの19世紀フランス宗教史』勁草書房、2011年。
- ・ 田村義也・松居竜五編『南方熊楠とアジア』勉誠出版、2011年。
- ・ 千葉雅也『動きすぎではいけない——ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』河出書房新社、2013年（河出文庫、2017年）。
- ・ 津田真一『反密教学』リプロポート、1987年（春秋社、2008年）。
- ・ 津田真一『アーラヤ的世界とその神——仏教思想像の転回』大蔵出版、1988年。
- ・ 鶴見和子『南方熊楠——地球志向の比較学』講談社学術文庫、1981年。
- ・ 鶴見和子『南方熊楠・萃点の思想——未来のパラダイム変換に向けて』藤原書店、2001年。
- ・ 鶴見和子・頼富本宏『曼荼羅の思想』藤原書店、2005年。
- ・ 内藤栄『舍利莊嚴美術の研究』青史出版、2010年。
- ・ 中沢新一『森のバロック』せりか書房、1992年（講談社学術文庫、2006年）。
- ・ 中沢新一『東方的』講談社学術文庫、2012年。
- ・ 中沢新一『熊楠の星の時間』講談社選書メチエ、2016年。
- ・ 袴谷憲昭『本覚思想批判』大蔵出版、1990年。
- ・ 橋爪博幸『南方熊楠と「事の学」』鳥影社、2005年。

- ・ 原田健一『南方熊楠——進化論・政治・性』平凡社、2003年。
- ・ ひろたまさき『福沢諭吉』朝日新聞社、1976年（岩波現代文庫、2015年）。
- ・ 松居竜五『南方熊楠——一切智の夢』朝日選書、1991年。
- ・ 松居竜五『南方熊楠——複眼の学問構想』慶応義塾大学出版会、2016年。
- ・ 松居竜五・中瀬喜陽・月川和雄他編『南方熊楠を知る事典』講談社、1993年。
- ・ 松居竜五・岩崎仁編『南方熊楠の森』方丈堂出版、2005年。
- ・ 松居竜五・田村義也編『南方熊楠大事典』勉誠出版、2012年。
- ・ 松居竜五編『南方熊楠の謎——鶴見和子との対話』藤原書店、2015年。
- ・ 松本郁代『中世王権と即位灌頂——聖教のなかの歴史叙述』森話社、2005年。
- ・ 三浦節夫『井上円了——日本近代の先駆者の生涯と思想』教育評論社、2016年。
- ・ 三浦節夫『井上円了と柳田国男の妖怪学』教育評論社、2013年。
- ・ 水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、2008年。
- ・ 宮野真生子『なぜ、私たちは恋をして生きるのか——「出会い」と「恋愛」の近代日本精神史』ナカニシヤ出版、2014年。
- ・ 安丸良夫『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈』岩波新書、1979年。
- ・ Gerald Figal, *Civilization and Monsters: Spirits of Modernity in Meiji Japan*, Duke University Press, Durham and London, 1999.
- ・ J・E・ケテラー『邪教／殉教の明治——廃仏毀釈と近代仏教』ペリかん社、2006年。
- ・ J・S・ミル『宗教をめぐる三つのエッセイ』大久保正健訳、勁草書房、2011年。
- ・ J・S・ミル『自由論』塩尻公明・木村健康訳、岩波文庫、1971年。
- ・ J・S・ミル『評註 ミル自伝』山下重一訳、御茶の水書房、2003年。
- ・ J・S・ミル『コントと実証主義』村井久二訳、木鐸社、1978年。
- ・ L・アルチュセール『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』上・下、西川長夫訳、平凡社ライブラリー、2010年。